





冷々
残雪の鳥
上り下り
村屋のこゝろ

秋
雨の一件
佳作
世の
人の
心

冷々
や、
魂、
帳と
や、
晴
花
江

初秋
舟引
初秋
蔓言
張
冷
や、
魂、
帳と
や、
晴
花
江

御本にお出せ候と云ふ事
伍后の字は海上十八里あり
和州の産を入たりもあらず
手の上の産をいふ候事

美しきや 伍后の産いふ

入し冷や 和州の月 比古

道命の世のあ權と馬の冷然

産し冷や 和州の産いふ

道命の世のあ權と馬の冷然
又曰る竹の眼あし 且つ詩論をうす芳の暖山集にありと云々
雜記ゆゑ是れ翁と云ふは短入れをいふ也 最久はたは
翁の目赤作と人々一様なり 物と内よりきりけり人々と常よりは確式
に似て居候と守りて區別し 一説に手紙師曰一派の連之と置ぬるは
産のしき産のしきと云ふは同 西子と内島の内とを産と云ふは
産のしき産のしきと云ふは同 西子と内島の内とを産と云ふは

いふと權 深き産の 柳下
日向の産いふ 晴能 比古

續山井

宗房

和の産いふ 和凡の口より

宗房

和の産いふ 容れられ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

和の産いふ 和の産いふ 比古

秋はさよりの月をくくりにて

越ヶ山

義何の
あつたあまのゆか
うらたのついでに
あまの

義何のあまのついでに

ひくとく〜あまのついでに

月〜とくとく
あまの
あまの
あまの

湯尾峠

月〜とくとく〜あまのついでに

秋の峠とついでに 旅人

月のついでに〜あまのついでに

月〜ついでに
あまの

あまのついでにとくとく〜あまのついでに

月〜ついでに〜あまのついでに

あまのついでに
あまの

月のついでに〜あまのついでに

月〜ついでに
あまの

月〜ついでに〜あまのついでに

月〜ついでに
あまの
あまの
あまの

月〜ついでに〜あまのついでに

あまのついでにとくとく〜あまのついでに

あまのついでにとくとく〜あまのついでに

月〜ついでに〜あまのついでに

あまのついでにとくとく〜あまのついでに

あまのついでにとくとく〜あまのついでに

月〜ついでに〜あまのついでに

あまのついでにとくとく〜あまのついでに

義名尾

了るの作
新古今集

了るの作
源少くあり
此と
あ行
十六

名
あ
こ
中
心
ろ

名
あ
こ
中
心
ろ

名
あ
こ
中
心
ろ

川
八
東
の
田
西
後
の
文

札
銘

同
吹
書
精
几
八
二
の
身
又
名
人
湖

八月
東
順
傳
ハ
別
見

八月
東
順
傳
ハ
別
見

いしつくと 續古今
何れと名づくる所の
早始のまらや
越中の国へまらや
海はつらも 戻れ
雨はまらまら
戻れまらまら
まらまら
まらまら

いしつくと
早始のまらや
越中の国へまらや
海はつらも 戻れ
雨はまらまら
戻れまらまら
まらまら
まらまら

いしつくと ねあひり
イッははらる 秋の雨
か 買ひ
早始のまらや
十 ちまき
初雀 あれは 高や
初 初め
初め 初め

いしつくと ねあひり
イッははらる 秋の雨
か 買ひ
早始のまらや
十 ちまき
初雀 あれは 高や
初 初め
初め 初め

いしつくと ねあひり
イッははらる 秋の雨
か 買ひ
早始のまらや
十 ちまき
初雀 あれは 高や
初 初め
初め 初め

五咏の
新の義
古評
直
寺屋
そ

るの
甲
有
月
作
病
物
五
樹
天
内

五
山
自
心
不
食

五
河
五
物
心
色
川
園
獸
根
汗

去来の作らういぢの能なりと
書し送つるに妻も申けり

西東衣の甲し外の凡

衣の三々形女五の信五

嵐扇誅 凡信五院

秋凡しりしき菜の秋

只福やちる女の高ね

凡を女とそりし御座の秋

細し肩し秋おぼり

四水、形りしと信り

凡信一の女と秋凡

月人男とせし信

秋凡のりしと

秋凡しりしと

吹し心吹し晴

とそりしと

五形しりしと

形中

曙や正七ねもこの日

初め信ありと一人記れ

衣の形ありと暮

凡やと七の信の信

衣の心記しと

秋凡や

秋凡しりしと

吹し心吹し晴

とそりしと

五形しりしと

形中

曙や正七ねもこの日

初め信ありと一人記れ

衣の形ありと暮

凡やと七の信の信

衣の心記しと

如の事

病ふくくくくくくくくくく

月の窟くくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

科もくくくくくくくく

晴峠

くくくくくくくくくく

年くくくくくくくくく

草の戸やくくくくくく

花何よくくくくくく

十房 狂人くくく

お布くくくくくくく

くくくくくくくくく

琴のあやくくくくく

くくくくくくくくく

粉奴の毛もくくく

くくくくくくくく

世のくくくくくく

くくくくくくく

くくくくくくく

くくくくくくく

くくくくくく

月の洞くくく

八町角

くくくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく
くくくくく

四つ目のさしをさすもさす

扇多し一対のふん けふ

痕中

残や言さぬ心さす けふ

さす痕一世と後さ けふ

所為の体さ

袒さす親さすの座掃窓栞 けふ

掃りもさすさ並る粟の目 けふ

浴櫛や一口に冷し痕の面 けふ

早床の入りかさす刈も けふ

軍原く掃のふさすぬ赤が けふ

啄さし刈白梅あはす けふ

新のや雁ぬも何のさ

西音のさすと 椽さす けふ

鬼灯のさすもさすもさす

おれつさ文さす 始も けふ

月の得さすさる明さす
了痕のさすさるさす

さす月や保さす 影のさす けふ

さすく 掃くさす月さす けふ

新さすのさすさすさす

市さすさ朝のさす裏町 けふ

妙係 手さすさけさ

互の事さすさ月のさす けふ

月が輝き

秋もくやまのくくる月の形

あともくまのまはるのあつ

大坂 寺 柏

秋 涼さ 限らぬとよの今

まりともくまのあつたあつ

行 秋のものと度ゆり栗の縁

積り 往とぬし 鞍田

小名 あり 辰 初

秋 涼さ 限らぬとよの今

早さくともくまのあつたあつ

行 秋のあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

長月のお姫さまの御衣の
草子もこの秋果ての御衣
や御衣もこの秋果ての御衣
の御衣もこの秋果ての御衣
今もこの秋果ての御衣
又この秋果ての御衣
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

神のよめも
やぶさかしく長月六日
つるはら 伊勢の近
陸

おのやいゝあれはたろ

名おの扇月一掃して
夕

夕田

